

影浦内科學教室

当時の教室員は影浦尙視教授、菊野晴二郎助教授、古川一郎、呉福順の両助手、森沢陽亮副手、古閑達也、柴田清学部仮卒業生、吉川清、林某の医専仮卒業生、雇の近藤次義氏、定婦の田川キク氏、それに長島一子看護長以下二十四名の看護婦であつた。

被爆時の状況

影浦教授は諫早へ出張中で難を免がれ、菊野助教授は出勤後所用のため帰宅中（竹之久保町）爆死。古川助手は教室内で被爆、救出の後死亡す。呉助手は寄宿先で爆死。

森沢副手は長島看護長等六人の看護婦と看護室で被爆するも殆んど傷なく、室内の者も無事であつた。古閑学部仮卒業生は高北病棟で被爆。

吉川、林医専仮卒業生は不在。

近藤氏は研究所で、田川氏は教室内で夫々爆死。

福田、原の両看護婦は非番で寄宿舎にて被爆し、原看護婦は即死、福田看護婦は数日後高島の自宅で死亡。山下看護婦は高北で入浴中被爆し大浦の自宅で約一ヶ月後死亡。松本看護婦は高南病棟で被爆、約一ヶ月後死亡。湯川、樫山看護婦も教室内で被爆しその後相次いで死亡す。

死亡者の官職と氏名

官職	氏名
助教授	菊野晴二郎
助手	古川一郎
学部仮卒業生	呉福順
雇	柴田清
定婦	近藤次義
看護婦	福田キク
四	福田艶子
三	山下栄子
二	原下衛子
年	松本リキ
年	湯川明子
"	樫山フサエ

原爆當時を回想して

影 浦 尙 視

昭和二十年八月九日午前十一時過ぎ我が長崎医科大学は一瞬にして文字通り壊滅し、同時に八百五十余名の生命が犠牲となつた。

角尾学長はその二日前の七日（広島原爆直後）東京からの帰途広島を通過し、八日（大詔奉戴日）朝八時前浦上着直ちに出勤、一同を集め訓辞をした。即ち広島を通つたのは夜であつたが、新兵器による被害状況は、実に凄惨の極みであつた。比較的軽傷の人々に、当時の模様をきいた所を総合すると、ピカツと光り、爆風のために家屋が倒潰し、続いて火災が起る、而して爆弾は落下しない、上空には異様な形の雲乃至異常な色の雲を見た者、又落下傘を見た者がある。長崎にも直ぐ来るであろう、防空の際は従来のように只爆音のみに注意したのでは駄目である云々、而して一同一層の警戒に努力す可き事を強調したのであつた。午後の緊急教授会に於て、十日から休講にする事が決定せられた。若し一日早く九日からとせられたならば、学生等の被害は著しく少かつたに違いない。

余は昭和十九年の十一月以来県立教員保養所長を兼任し、毎週一回木曜日に諫早へ出張していた。八月九日（木曜日）例の通り諫早へ行き所員及び患者を集めて、新兵器の事を話し大いに警戒す可き事を要請した。頭上にB29の爆音をきながら患者数人を診療せし時ピカツと、紫線一閃（大略マグネシウムの焰に似ているが之に少し黄色の混じたもの）余等は瞬間廊下に伏せると同時に、一大爆発音をき、病院は著しく震

動した。此音は附近の山上に装備してあつた大いなる防空砲がB29をねらつてせる発砲によるものであつたが時間的にみて、長崎上空に原爆落下すませて帰るB29であつた。

病院の外の松林に出てみれば、遙か長崎上空に異様な雲を見、続いてものすごい様相の而も特種の色調を帯びた噴煙の上るを見た。その内に二つの落下傘がゆらりゆらりと下降しているのも見えた。余等は又原爆を落下せしめるのではないかを恐れ、防空壕へ退避したが、それは既に爆弾をおとし終つたので、江の浦方面へ落下したのであつた。

幸にして保養所には何等の被害がなかつた。諫早長崎間の交通機関は全く無くなつた。又徒歩で帰途するにしても昼間は危険きわまりない状態であつたので、漸く夕方から帰途についた。幸にして一車夫の好意で人力車で夜十二時長崎についた。余の到着せる時は今町附近は真に焦熱地獄であつて丁度慶華幼稚園が焼壊するのを見た。翌朝夜の明るるを待つて、金比羅山を越えて医大につき先づ角尾学長を探した。君は病院外の横穴壕中の輸送車の上に鮮血に染つた国民服で仰臥していた。曰く「僕は大丈夫だ。高木君が苦しそうだ。古屋野君を学長として大学の再建に努力して呉れ。」見れば高木教授は学長と並んで同様輸送車に仰臥し、非常に胸苦しいと云つていた。（中一日おいて同君は死亡した）教授の大部分は已に犠牲となつた事をき、愕然とした。後で判つた事であるが教授は現場に居た十六名中十二名即ち四分の三死亡した。以つて如何に被害が甚大であつたかを想像する事が出来る。基礎教室のある山上に居たものは文字通り一〇〇％生命を失つた。之は爆心に近い事、木造であつた事、講義中であつた事の悪条件による。（当時空襲警報解除）病院は

コンクリート建であり比較的爆心に遠かつたためそこに居た者の大部分は助かった。結局即死と後に死亡せるものとを合計すれば、全学人員の約三分の二を失つた事になる。

角尾学長は数日の後時津方面滑石村の或る神社に移された。それは主治医である調教授が疎開していて治療に便利なこと、又食糧を得易い事、又神社は森の中にあつて非常に涼しかった事等によつたと思われる。

君は被爆当時外来診察中であつたが、その室はビルディングの端で爆心に向い大きなガラス窓があつたので最も悪条件の下にあつた。一見背部及び臀部にガラス破片による外傷のみであつたので、最初は生命の危険は考えられなかつた。骨髓が犯されている等の知識は無かつた。

当時不思議と思われた事は、傷創が少しも化膿せぬ事であつた。且つ肉芽は頗る不良であつた。蓋し当時消毒は甚だ不完全であつたのである。白血球計算は当時不可能であつたが化膿せぬ事は矢張り骨髓の障碍によるものと考えられる。其他口腔炎が著しく、又唾液分泌が殆ど皆無で、口内乾燥のため君は非常に苦しんだ。終り頃は食欲著しく衰え、貧血とルイソウ加わり、カヘキシーに陥つたが、意識は死の前夜迄明瞭であつた。以上の経過の中で特筆す可き事は、即ち化膿せざりし事、著しき唾液分泌障害存せし事、及び意識は殆ど最後まで明瞭であつた事である。角尾学長は、八月二十二日の朝即ち被爆後十三日目遂に死亡した。誠に遺憾である。

然し一時再建を危ぶまれた長崎医大が今日の如く復興充実せられた事を、君は満足に思うであらう。

当時の思い出

長 島 一 子

原子の空襲のあと早幾年もの歲月は流れ、今年は十周年記念として平和祈念像が建設され、その丘には文化会館が空高くそびえ、なんだか平和の使徒でもやつて来そうに思えますのに……

あの十年前の八月九日午前十一時二分――長崎市民の一人である私には永久に忘れることの出来ない一つの思い出として強く――きざまれ、あの当時のことを思いますと、なんだか悲しみのどん底に落された様な気がして、今なほ得も云われぬ憤りと、うら淋しい気持で一杯です。先日医大からわざわざ自宅にお尋ね下さつて、是非原爆当時の思い出の一端でいゝから、その当時のことを書いてくれとおたのみになりましたのでおことわりするのにも悪いと思ひまして、私の当時の追憶の一部分を書くことに致しました。

丁度午前十一時すぎ空襲警報解除となり非常袋をおろし、ずきんを取つた。入院患者の名札を書いて影浦先生の御部屋へおかけしようと思ひ私がエナメルの筆を取つていました。看護婦の池井さんが、そばに来て「姉長さん、私が綺麗に札をふきましよう」と云つて、そばに立つてふいてくれました。その横では森沢先生と、山田、内川、藤永の二三の看護婦が何か一生懸命にお話していた様に思ひます。その時何か「バーン！」と破裂した様な音がしました。それと共に急にあたりが真暗になつて何も見えなくなりました。誰か「森沢先生！」とよんでいる声が聞え

ます。私はすぐきつと大きな爆弾が投下されたものと直感いたしました。私は暗闇の中で椅子にかけておりましたが、すぐ立ちあがり、両手で顔をおおい、あゝまだ自分は生きていたんだなあ！と感じました。なんとかしてはい出して見ようと思ひ暗い所を手探りに地下室迄ゆきましたが、誰一人として室にはいません。

内科病棟へ直撃弾でもおちたと思ひ一人で地下室へ坐っていましたら、みんな血だるまの様な人ばかり、わん／＼泣いて来た様に思います。角尾内科の中村先生も来られて、「婦長さん、やられたですね、今すぐ出たら、機銃掃射されるかも知れませんから、もうしばらくしてから出た方がいゝでしょう」と云われました。しばらく待つている内にみんながぼつ／＼下りてきました。

地下室は当時レントゲン科が疎開して来ていましたので、そこで久松婦長さんに会いよかつたですねとお互によるこび合いそのまゝ別れてしまいました、その内に周田がぼつ／＼もえて来たので地下室にいた人に全部山の方へ逃るように云つて私も最後に本館前を通り穴弘法を経て西山の方へとげてゆきました。森沢先生はじめ、岡野さん、内川さん、藤永さん、姉本さん等も一緒でした。——途中、調先生、古屋野先生方が元気でいられたのにお会いしました。山の中でしばらくやすんだとき、太陽を見ましたら、丁度月の様に見えました。ふだんはあんなにまばゆい太陽がこんな風に見えたのははじめてでした。

こゝに古屋野外科の大和田野先生が坐つていらつしやいました。「先生御元気でしたね」と私が申しましたら、「僕は何もわからない」と云われましたが別に大した怪我也見受けませんでしたのに諫早方面迄歩い

てゆかれましたのが悪くてあとで亡くなられました様にお聞きしました。眼科の内田婦長さんともそこでお会いしました。その晩は西山のある家の防空壕で一夜をあかしました。おそく迄飛行機がとんで来て、ピラをまいていました。

翌日私達元氣な者二三人でもいゝから、医大の方へ下りて行つて見ようと思ひ森沢先生が云われましたので飛行機がとんで来る中を穴弘法の辺り迄いききました。そこには古屋野外科の岩永先生がおられて、横穴からの診療に用なヨード丁機、脱脂綿、ピンセット等持ち出してせめて医大関係の人だけでも治療してあげるから手伝つてくれとおつしやいましたので、飛行機がぶん／＼とんで来る中を一日中手伝ひ、その晩は穴弘法の近くで周田にごろ／＼死んでいる人と共にすごしました。昼間はやけつく様に暑いのに晩は寒くてねられません。みんな起きて真夜中に体操したりして一夜をあかしました。

翌日影浦先生が尋ねて来て下さいました。丁度先生は原爆の日は諫早の方へ出張中で御留守でした。当時教員保養所の所長として毎週木曜日には出張なさることになっていました。先生の御顔を見ました時には思わず涙が出て、泣けて／＼仕方がありませんでした。

留守中糖尿病患者のカルテ等非常袋に入れて空襲の時は何時も持出ししていましたのに今度はその一つも持出し得なかつたことは残念に思いました……。

穴弘法では薬理の祖父江先生にもお会いしました。「僕はお金を一銭ももたないから、影浦先生へ貸してもらおう様に云つてくれませんか」とおつしやいました。あとで行つて見ましたら、下宿の方が迎えに来られ、

戸板にのせて運んで行かれたあとでした。その後とう／＼なくなられました。先生はこちらへ赴任してまだ日も浅いの、丁度原爆の為に死を求めに來られた様なものだと思ひました。

大浦舎監先生にもお会いしました。丁度赤痢で高北病棟へ入院されたばかりの所でした。長男の方は自宅で爆死され、医専在学中の次男の方が先生を背負つてすくいだされた由。あとで御二人共亡くなられました。

私、川口婦長さん、今の坂本総婦長さんの三人で平戸迄御墓参りにきました。奥様が泣いて当時のことを語られ、せめて三人の内一人でも生きてくれていましたらとなげかれ、おなぐさめの言葉もありませんでした。

三日目の夕方看護婦の山田さんの御父様がむかえに來て下さいました。

「折角お元気で生き残つておられるのに三日間も御飯もたべずにいると、貴女方迄病氣になつてしまふよ、早く一緒に來て下さい」と云われました。御言葉にあまえ、森沢先生はじめ、山田、広瀬、内川、北村、大黒、篠崎等生き残りの看護婦と共に長崎をあとにしました。飛行機がとんで來る中を待避しながら、てく／＼歩いて道之尾迄行きました。林先生が道之尾で三菱の寮に居られた關係で一晩とめて戴くことになりました。

三日目はじめて顔を洗い疊の上で蚊帳をひいて戴き心配しながらも一夜を明かしました。翌日私と篠崎看護婦はしばらく山田さんの家に御世話になり、他の人は自分の郷里へと別れ／＼になりました。

あまり怪我もありませんし毎日退屈なので伊木力の大浦さんの家迄尋ねて行こうと思ひ山田、篠崎さんと一緒に山道をタオルを冠つて歩いて行

きました。大浦さんとお互に元氣であつたよろこびに思はず泣きながら会ひました。大浦さんは少し怪我して警防団の人に連れられてかえつたそうです。お内の人も大変よろこばれ、二三日泊りました。丁度終戦の日、ラジオも新聞もないので、何も分らず飛行機が低空にとんでくるのに、又空襲と間違つて退避したりしているうち、警防団の方が終戦の報を知らせて來て下さいました。

又歩いて長与へかえる途中「敵が上陸する——たつた今そこ迄來ている……みんな先の方へにげる様にと命令だ」などと食糧等を持つてにげてゆく人々に会い一抹の不安をいだきながらも長与へと向いました。そして八月三十一日、何の連絡もないので郷里の方へ帰つてしまいました。再び長崎医大が復興するとも思はずたゞ生きていたよろこびをいだきながら、……

それから長崎医大が新興善小学校あとへ……又諫早の海軍病院あとへと再建の途についていた二十二年の十二月に何等長崎医大復興のためにつくすことなく辞めさして戴きました。

最後に当時原爆のためになくなつた夢多い若い白衣の乙女達の冥福と長崎医大の復興を祈りつゝペンを擱きます。

(当時影浦内科看護長)